



ご挨拶

第32回日本産婦人科・新生児血液学会
学術集会会長 **板倉 敦夫**
順天堂大学 医学部 産婦人科学講座 教授

第32回日本産婦人科・新生児血液学会学術集会は、2022年（令和4）年6月3日（金）～4日（土）に東京 永田町 JA共済ビルカンファレンスホールで開催します。わが国でのCOVID-19の感染拡大のため、第30、31回の学術集会がオンラインとなりました。今回は何としてもオンライン開催を実施したく、感染対策に十分注意しながらの現地開催を予定しました。COVID-19感染状況を予測することは困難ですので、再拡大に備えて、6月10日（金）～24日（金）までのWebによるオンデマンド配信もいたしますが、できるだけ多くの方の現地への御参加をお願いしたいと考えております。

本学会は1976年に産婦人科血液研究会として産声を上げましたが、1975年の妊産婦死亡率は28.7（出生10万対）で世界の主要10か国の9位でした。その後周産期死亡率は早々に世界最低となりましたが、妊産婦死亡率の低下は思わしくなく、「すこやか親子21」で半減させることを目標として掲げられました。死因も当時は妊娠中毒症（現在の妊娠高血圧症候群）が1位でしたが、1990年ごろから分娩後出血と産科的塞栓症に変わりました。本学会HPのトップページに、出血と血栓-死亡ゼロを目指して-があるように、この原因での死亡を減少させることを本学会の目標として、多くの周産期医療関係者ととともに努力を重ねてまいりました。その結果、2020年の妊産婦死亡は分娩後出血が1人、産科的塞栓症も4人まで減少し、妊産婦死亡率は2.7と世界最小国に近づくことができました。また昨年乾燥人フィブリノゲンが後天性低フィブリノゲン血症への適応拡大が決まり、新生児領域のトピックであるビタミンK欠乏性出血症発症予防に関する提言も公表されました。こうした我々を取り巻く環境が大きく変化する中での学術集会ですので、これまでの歴史を踏まえつつ、本学術集会での議論が、これからの日本産婦人科・新生児血液学会の進むべき方向性を示すことにつながると期待しております。その1つとして、産科DIC診断基準の改訂作業が進み、暫定版が作成されましたので、これを解説いたしますので、会員のご意見をいただきたいと考えます。モニター越しではなく、皆さんと直接お会いして、議論できることを楽しみにしております。

1人でも多くの会員の皆さんのご来場をお待ちしております。